

## 旅を楽しむ

宮本 昭司（学芸・昭和35年卒）

子どもの頃から高歩たかあるき（遠出）をする癖があり、度々迷子になりそうになった。長じて旅行好きになり、大学で地理学を専攻することになったのも、そのことと無関係ではないと思っている。

現職時代は、しごとの空すき間を見つけて小さな旅に出かけていた。退職後は時間的にも余裕ができ足を伸ばして海外へ出かけるようになり、旅に広がりが増えてきた。

ことわざに、「所変われば品変わる」とあるが旅は見知らぬ土地で珍しい（愛めず）ものに出合い、驚き、発見、感動を体験するとともに、日常をしばし離れることからくる解放感を楽しむものだと思っている。

以前にある講演で、「旅は情緒、三情の楽しみがある」という話を聞いた。三情とは、旅情（旅で感じるしみじみとした思い）、人情（土地の暮らしや人々との交流）、事情（自然・歴史・文化）のことである。どんな旅を楽しむかはその時々によるが、これまでの旅の経歴を振り返ってみると、多くが事情を楽しむ旅になっており、旅に先だっては事前に情報収集・下調べなど入念な準備した内容の詰まったものになっていた。しかし、準備が行き過ぎると準備した内容を確認する追体験のようになり、旅の実感はあるものの、驚きや発見の喜びが薄れてしまい、本末転倒になってしまう。旅を楽しむにはゆとりが必要である。これまでの旅に飽き足りないものを感じるようになり、自由度やゆとりの大きい旅を選び、人情を楽しむ旅にシフトしていった。人との出合いを大事にし土地の暮らしに関わっていくことで旅の感動や充実感が大きくなった。特に異なる言語の人々との交流では、ことばが十分に通じ合えないことで、かえって心が通じ合えるような喜びが実感できる。しかしこの旅では能動的に働きかける姿勢が要求され、体力的にも精神的にもかなりのエネルギーが必要である。

高齢になり、旅への思いは募るが体力や気力にかげりがでて、特に肉体的な自信が持てなくなり、近年は旅の準備にたまひまをかけず、手持ちのささやかな知識を頼りに出かけている。旅の事情や人情もそのときの気分でほどほどに楽しむ欲張らないずぼらな旅をしているが、心にゆとりが持てて、くつろいだ安らぎに似た感覚を楽しんでいる。究極の旅は放浪であると思っている。あこがれはあるが、そこまでの覚悟はできていない。これからも年齢と健康に相談しながらいろいろと自分の旅を楽しみたいと思っている。